

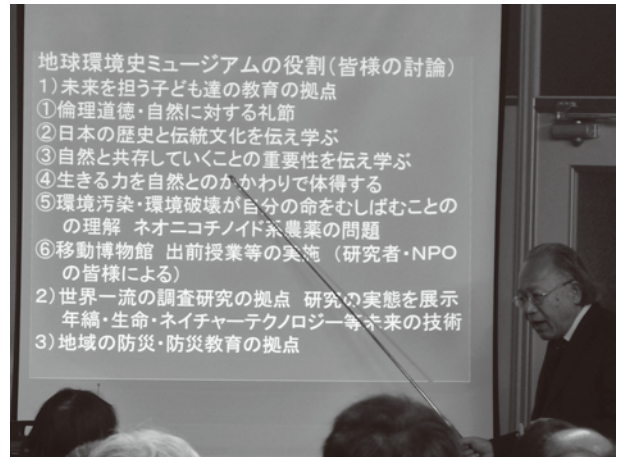
平成 26 年度 第 13 回

NPO 静岡県自然史博物館ネットワーク総会と記念講演

事務局



総会記念講演『自然環境史とは』
安田喜憲先生



安田先生が考える
『ふじのくに地球環境史ミュージアム』の理念

4月20日(日)午後、自然博ネット第13回総会が、静岡県自然学習資料センター(ふじのくに地球環境史ミュージアム整備課清水分室)で開催されました。

記念講演『地球環境史とは』

まず、総会に先立ち午後2時から、静岡県補佐官の安田喜憲先生による『地球環境史とは』という総会記念講演が行われました。安田喜憲先生は、平成27年にオープン予定の県立自然系博物館『ふじのくに地球環境史ミュージアム』の基本構想検討会の委員長をされ、川勝知事とともに、『ふじのくに地球環境史ミュージアム』という博物館の名称を提案され方です。今回の講演では、博物館の名称として使用した『地球環境史』について説明していただき、どのような県立博物館を目指しているかについてお話ししていただきました。

講演では、まず西洋と東洋の建築文化の違い、また自然に関する価値感の違いについて述べられ、これまでの日本がいかに、西洋文化にあこがれを持ち、影響を受けてきたかについて述べられました。そして、西洋で生まれた自然史博物館というのは、西洋文明が自然を破壊つくしたあげくにできたものという考えが述べられました。安田先生の考えでは、森の文明・稲作漁労社会づくり、自然を

大切にすることが欧米のまねをして、『(西洋の)自然史博物館』をつくるよりも、自然を大切にすることが日本から新しい博物館をつくるという意味で、博物館の名称に『地球環境史』という言葉を入れて名付けられたそうです。また当初は、『地球環境史博物館』という名称を考えられていましたが、川勝知事の案で『ふじのくに地球環境史ミュージアム』になったそうです。

次に、自身の研究の“年縞”についての説明をされました。それは、水月湖の湖底堆積物から、過去5万年間の気候・環境変化が明らかになったというお話でした。その後、ギリシャ文明・メソポタミア文明または12世紀から17世紀のヨーロッパにおける森林破壊、日本で行われた一斉皆伐造林や三保の松原の農薬による環境への影響など、人類史における環境破壊についてお話しされ、自然環境を守るために、日本人が古くからつちかしてきた歴史や伝統文化を学ぶことの重要性について熱弁されました。

最後に安田先生は、これからつくる地球環境史ミュージアムのビジョンとして、『未来をになう子供たちの教育の拠点』、『世界でも一流の研究の拠点』、『地域の防災・防災教育の拠点』という3つの拠点施設を目指して、教育の内容として、『倫理道徳・自然に対する礼節』、『日本人が持っている歴史と文化をどう伝



H25 年度事業報告

えるか』、『自然と共存して生きるとは、どうということなのか』、『自然とともに生きる重要性』、『環境汚染・破壊が自身の命をむしろおぼか』ということを述べられました。また、これらの教育のために、移動博物館や出前博物館を行ってほしいと要望されました。

講演は予定時間を 15 分ほど過ぎてしまいましたが、終了後には、安田先生の希望により、会員との意見交換も行われました。

その後、休憩をはさみ総会を開催しましたが、安田先生には、総会の間、自然学習資料センターの標本室を見学していただきました。安田先生は、先生の予想を超えて集められた県内外の貴重な標本の数に驚かれていました。

平成 26 年度 総会

総会は、予定より 20 分ほど遅れて、まず天岸理事長の挨拶から始まり、県文化・観光部ふじのくに地球環境史ミュージアム整備課課長の大場 悟氏からご祝辞をいただきました。

その後、第 1 号議案：平成 25 年度事業報告、第 2 号議案：平成 25 年度 収支決算、第 3 号議案：平成 26 年度 事業計画案、第 4 号議案：平成 26 年度 収支予算案の審議が行われました。どの議案も原案通りに可決承認され、無事終了いたしました。

総会の最後には、整備課課長大場氏から、基本構想についてと、旧静岡南高校への移転について説明がありました。その説明によると、まず博物館の名称で使われている『ふじのくに』と『ミュージアム』は安田先生も述べられていたように、川勝知事の意向でつけられたそうです。移転と開館までのスケジュールについては、旧静岡南高校で行われている内装工事は、6 月中に終了する見込みで、その後



基本構想の説明、左：大場 悟氏、右：天岸理事長

駐車場の工事をし、7 月には自然学習資料センターの移転作業に入るとのことでした。本年度は、自然学習資料センターを継続し、平成 27 年度に『ふじのくに地球環境史ミュージアム』として開館し、数年後に、登録博物館を目指す方針とのことでした。基本構想については、これまでの経緯、博物館像・基本理念、活動の基本方針、管理運営体制についての説明が行われました。学芸員の雇用については、本年度 6 月より、環境史・地質・昆虫の 3 分野 3 名を採用し、平成 27 年度 4 月から脊椎動物、植物、古生物の分野で 3 名を採用する予定とのことでした。

この説明後、会員から、いくつかの質問がありました。質問が多かったのは博物館の名称に関してで、『博物館の名称は、もうかわらないのですか？』や『博物館の愛称・略称を決めた方がよいのでは？』などの質問・指摘がありました。名称に関しては、構想委員会の意向を重視するとの回答で、愛称・略称については、今後検討していくとのことでした。また、多くの方が気になっている博物館のアクセスについても質問があり、その回答についても、今後検討するとのことでした。その他に、魚類を専門にする学芸員を募集すべきだという意見や『地球環境史資料とは、具体的にどのようなものなのですか。』などの要望や質問もありました。

以上で総会報告を終わります。NPO 自然博ネットは、博物館ができて、引き続き『ふじのくに地球環境史ミュージアム』の運営に協力し、博物館活動を続けていく方針です。今後とも、会員のみなさまのご協力をお願い申し上げます。